

池端屋敷小路遺跡

清里地区南北幹線 2 期整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 2 0 . 7

前橋市教育委員会

池端屋敷小路遺跡

清里地区南北幹線2期整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2020.7

前橋市教育委員会

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中核として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する池端屋敷小路遺跡は、本市西部清里地区の池端町にあります。清里地区には平成の古墳総合調査によって多数の古墳のあったことが確認されており、今回の調査では「清里村3号墳」周囲などが検出されました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和2年7月

前橋市教育委員会
教育長 吉川 真由美

例　　言

- 1 本報告書は清里地区南北幹線2期整備事業に伴う池端屋敷小路遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡名	池端屋敷小路遺跡（遺跡コード 2A253）
調査場所	群馬県前橋市池端町 154-10, 154-11
監理指導	小峰 篤（前橋市教育委員会）
調査担当者	高橋政光（技研コンサル株式会社）
調査員	茂木祐輔（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	令和2年5月20日～令和2年6月8日
整理・報告書作成期間	令和2年6月15日～令和2年7月30日
- 3 本書の原稿執筆はIを小峰、IVを茂木、他を高橋が担当し、編集作業は佐野良平（技研コンサル株式会社）が行った。
- 4 発掘調査・整理作業参加者は次のとおりである。

大川明子（技研コンサル株式会社）
安藤三枝子　池田正恵　伊丹茂一　大山四郎　後藤次雄　小林克宏　佐藤文江　塩野谷和夫　杉田友香
曾根 裕 曾根良美 田所順子 立川千栄子 水井憲一 西山康子 星野一江 細野竹美
- 5 本書における図面、写真、遺物は、前橋市教育委員会で保管している。
- 6 下記の諸氏・諸機関にご指導、ご協力を賜りました。記して謝意を表します。

山下工業株式会社

凡　　例

- 1 挿図中に使用した北は座標北である。
- 2 挿図に国土地理院発行 1/200,000『宇都宮』『長野』、1/25,000『渋川』『伊香保』、前橋市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。
- 3 造構名称は、古墳周堀：M、溝跡：W、土坑：Dである。
- 4 造構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

造構 古墳周堀・溝跡・土坑・・・1/60　　全体図・・・1/200
遺物 土器・陶磁器・・・1/3、1/4
- 5 本文および表中の計測値については（ ）は現存値を、〔 〕は復元値を表す。

目　　次

はじめに

例言・凡例

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の位地と環境	2
III	調査方針と経過	4
IV	基本土層	4
V	造構と遺物	5
VI	まとめ	9

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市長 山本 龍（道路建設課）（以下「前橋市」という。）が施工する清里地区南北幹線2期整備事業に伴い実施されたものである。当該工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地（前橋市0107遺跡・前橋市0885遺跡）内であることから、試掘確認調査（以下「試掘調査」という。）を実施した。

試掘調査は、事業地の一部が竹林であり、伐採等が必要となつたため2回に分けて行なった。1回目の試掘調査は、令和元年5月23日に実施した。調査の結果、近・現代の溝跡が1条確認されたのみであったため、1回目の試掘調査対象地における工事施工については支障ないものと判断した。2回目の試掘調査は、令和2年2月19日に実施した。今回の試掘調査対象地は、「上毛古墳続観」に「清里村3号墳」と記される古墳（現在は神明宮が鎮座している）の西側隣接地にあたることから、古墳周囲の検出が想定された。調査の結果、1108年降下の浅間B軽石が堆積する掘り込みが確認されたため、周囲の可能性が高いと判断し、埋蔵文化財の取扱いについて前橋市と協議した。工事計画から造構の現状保存は困難であることから、記録保存を目的とした発掘調査（以下「発掘調査」という。）を実施することで、前橋市と合意した。

令和2年4月6日付で前橋市より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が、前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで前橋市と合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。同年5月15日付で前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「池端屋敷小路遺跡」（遺跡略コード：2A253）の「池端」は町名を採用し、「屋敷小路」は旧小字名を採用した。

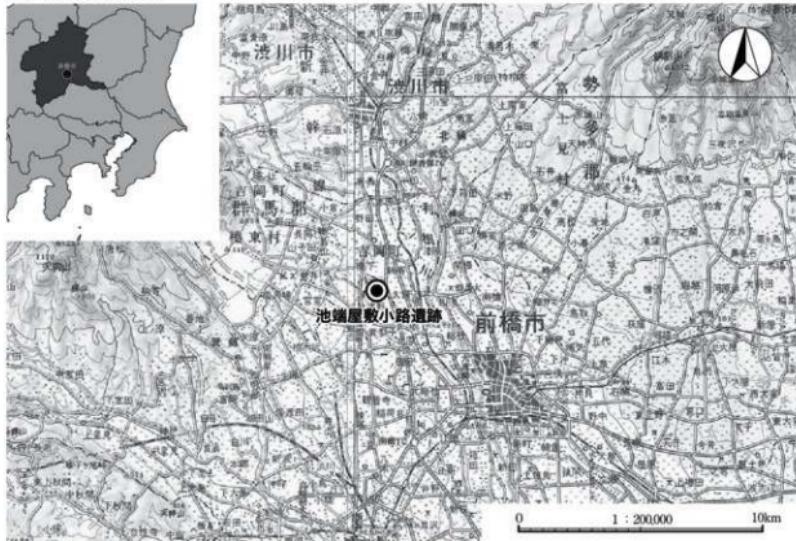


Fig.1 遺跡の位置

II 遺跡の位置と環境

遺跡の位置 (Fig. 1・2)

本遺跡が所在する池端町は前橋市の西端部に位置し、北部は吉岡町、西部は榛東村と接する地域である。遺跡から東側400mには関越自動車道路が南北に縱走し、駒寄SICの出入口が接する。西側750mには県道25号線高崎渋川線が走行する。周辺域は吉岡バイパス・上毛大橋の開通、駒寄SICの開設等の交通網整備が進み、小規模住宅団地の造成やショッピングモールの商業施設の進出により発展を遂げている。現在、駒寄SIC大型車対応化整備事業や県道161号線の駒寄SIC南から県道25号線に至る区間の工事が進行しており、更なる発展が期待されている。

本遺跡の地質は隣接する吉岡町南部の後期更新世後半の扇状地、すなわち榛名山麓から広がる相馬ヶ原扇状地の南東部にある。

歴史的環境 (Fig. 3、Tab. 1)

旧石器時代の遺跡については本地域および周辺において、確認されていない。

縄文時代の遺跡では七日市遺跡（2）で前期の住居跡が、清里長久保遺跡（7）では前期から中期の住居跡が検出され大久保A遺跡（3）、清里・陣場遺跡（5）は縄文遺物の散布地として報告がなされている。

本地域では弥生時代の遺跡の報告例は少なく、清里・庚申塚遺跡（6）が中期環濠集落遺跡として知られている。

本地域の古墳については総社古墳群、朝倉・広瀬古墳群などの大規模な古墳群は存在しないが本地域の北側には七世紀後半と伝えられる南下古墳群（15）、東側にはほぼ時期を同じくする長坂古墳（16）、全国でも類例の少ない正八角形墳をもつ三津屋古墳（17）が存在する。また、本地域の西側には6世紀後半に比定される大藪城山古墳（18）、上八幡古墳群（19）、柿の木坂古墳群（22）、7世紀では、雑子古墳群（20）、長久保古墳群（21）が近い距離で点在する。この時期の住居跡を伴う遺跡としては、大久保A遺跡において後期の住居跡が検出されている。

古代では、七日市遺跡、大久保A遺跡では奈良・平安の遺構が多数検出し、製鉄関連遺構を検出した清里・陣場遺跡、清里・長久保遺跡では主に平安時代の遺構を数多く検出している。その他に奈良・平安時代の遺構・遺物を検出した遺跡は、片貝II遺跡（9）、下八幡南遺跡（10）、掘立柱建物跡を検出した前原遺跡や中御所II遺跡（12）、三疋遺跡（13）などがあげられる。これらの遺跡は地域的な片寄り無く、本地域の周辺に均等な分布を表しているものである。

本地域およびその周辺地域では、前橋市東部の微高地に数多く見られる環濠屋敷遺構の存在は確認できていない。中世以降、上州では長尾氏・長野氏といった豪族が割据し、前橋市内においても城館が数多く知られている。南北朝期に活躍した桃井氏は桃井郷を本拠としており、大藪城山古墳を利用し構築した桃井城など関連する史跡が吉岡町・榛東村周辺に見られる。



Fig. 2 前橋の地形

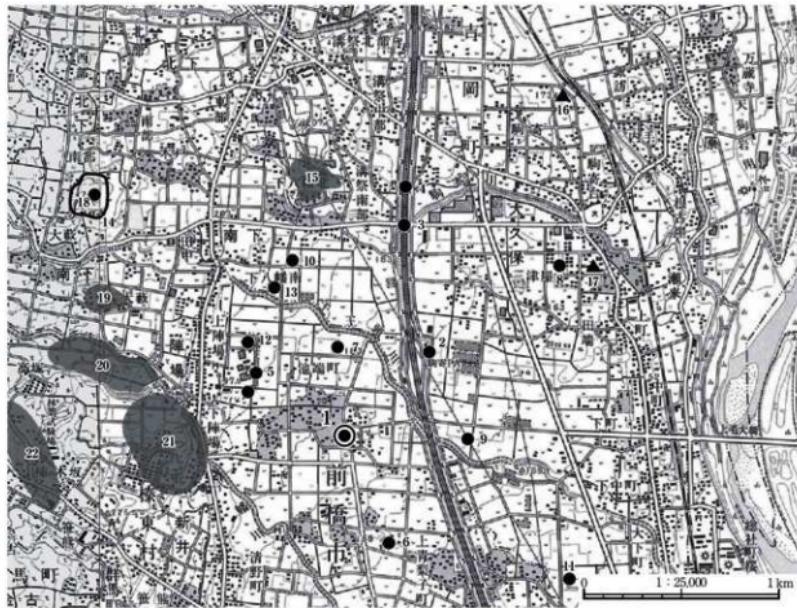


Fig. 3 周辺遺跡図

Tab. 1 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	時代: 主な遺構・出土遺物	報告書・参考文献
1	池端町敷小路遺跡	本造跡	
2	七日市遺跡	縄文: 前期住居・遺物散布。奈良平安: 住居・溝、中世: 昌状遺構・溝	吉岡町教育委員会 2017 「七日市遺跡」
3	大久保 A 遺跡	縄文: 遺物散布。古墳: 後期住居。奈良平安: 住居・掘立柱建物跡。中世: 道路(段差)遺跡	吉岡町教育委員会 勝馬島教育委員会 日本道路公団 1986 「大久保 A 遺跡」(1区)、「大久保 A 遺跡」(2区)
4	大久保 B 遺跡	平安: 住居	(財) 勝馬島地域文化活性調査委員会編 1989 「有馬遺跡 I・大久保 B 遺跡」
5	清里・渾跡遺跡	縄文: 遺物散布。奈良平安: 住居。勝馬島開発遺構	(財) 勝馬島地域文化活性調査委員会編 1981 「清里・渾跡遺跡」
6	清里・庚申塚遺跡	住居・中間後環塚兼施塚。古墳: 古墳。平安: 住居	(財) 勝馬島地域文化活性調査委員会編 1984 「清里・庚申塚遺跡」
7	清里・長久保遺跡	縄文: 前一中期住居跡。古墳: 古墳。平安: 住居・墓坑	(財) 勝馬島地域文化活性調査委員会編 1986 「清里・長久保遺跡」
8	本宿遺跡	平安: 住居	吉岡町教育委員会 1991 「本宿遺跡」
9	片貝 II 遺跡	奈良平安: 住居	吉岡町教育委員会 2001 「片貝 II 遺跡」
10	下八幡山遺跡	奈良平安: 住居	吉岡町教育委員会 2002 「下八幡山遺跡」
11	前原遺跡	平安: 住居・掘立柱建物・大溝。近世: 石垣遺構	吉岡町教育委員会 2002 「前原遺跡」
12	中野所 II 遺跡	古墳: 道路(段差)遺構。平安: 住居	吉岡町教育委員会 2005 「中野所 II 遺跡」
13	三元遺跡	奈良平安: 住居	吉岡町教育委員会 2010 「三元遺跡」
14	大軒遺跡	古墳: 前方後円墳。中世: 城郭	吉岡町教育委員会 2012 「大軒遺跡」
No	遺跡名	年代: 構造・特徴	
15	南木古墳群	7世紀後半。A号-E号の名称で知られている5基の古墳が地図に示されている。古墳は大槻山と呼ばれる岩峰流丘斜面の手前100メートルほどの範囲内に集中して分布している。	
16	長坂古墳	7世紀中頃か。円墳。全長8.6m。残存高1.9mを測る。昭和40年代の開發で破壊。平成21年調査復元。	
17	三津原古墳	7世紀後半。正八角形墳。埴輪は瓦器工法による2段から構築されており、上段が約6m、下段が約9mを測る。	
18	大蔵城山古墳	6世紀末。前方後円墳。試掘調査により、全長47m、後円部径25m、前方部長24mと想定される。後に桃井城に利用される。	
19	上八幡古墳群		-
20	碁子古墳群		-
21	長久保古墳群	7世紀代。前方後円墳2基を含む2基が確認されている。多くが横穴式石室を持つ。	
22	柿ノ木坂古墳群	6世紀末。柿ノ木坂古墳は全長30m、高さ3.9mの円墳である。	

III 調査方針と経過

1 調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、清里地区南北幹線2期整備事業地内であり、調査面積は436.00 m²である。グリッド座標については世界測地系に基づく平面直角座標第IX系を使用し、X = 48,000、Y = - 74,000を基点とする4 mピッチのものを使用し、経線をX、緯線をYとして北西隅を基点として番付けして呼称した。

発掘調査は遺構確認面まで重機(0.45 m³バックホー)にて表土掘削を行ない、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、測量・写真撮影の手順で実施した。遺構調査については土層の堆積状況を確認するため、土層ベルトを適宜設定した。なお、出土遺物に関しては、床面直上や遺構に伴うと判断したものはNo遺物とし、他の覆土中の破片等については一括遺物として取り上げた。

遺構の記録については、図面作成はトータルステーション・電子平板を用いての測量・編集、記録写真は35mmモノクロ・リバーサル、デジタルカメラの3種類を用いて撮影を実施した。

整理作業における出土遺物の断面計測・外面調整の撮影には、従来の手法から3Dスキャナー型三次元計測器(KEYENCE社製、VL-300)による機械計測に切り替えた。誤差1 mmの1/1,000という高精度な全点取得が可能で、従来の2次元図化以外の用途にも発展性が見込めるものである。報告書掲載の遺物写真に関してはデジタルカメラ(Canon EOS 5D・EF200 mm L)を用いて撮影を行った。遺構図に関してはデジタルによる修正・編集作業を行い、報告書の編集に関しては主にAdobe Illustrator CS5・InDesign CS5を用いてDTPの手法で編集作業を行った。

2 調査経過

5月20日より現地での発掘調査を開始した。22日から重機(0.45 m³バックホー)を使用した表土掘削を開始し、同時に遺物包含層の有無を確認した。26日、作業員による遺構確認・掘削作業を開始。29日、検出した2条の溝(W-1・2)からの湧水処理を行い、周堀(M-1)外周の立ち上がりの検出作業及び周堀の最深部の確認作業を行った。6月1日に各遺構の全景撮影、2日にドローンによる調査区全域の写真撮影を行った。2日に前橋市教育委員会の立会いによる完了検査が行われた。3日から8日まで埋め戻し作業、同時に原状復旧として整地・注意喚起立て看板・発掘区周辺のロープ撤去を行った。8日、発掘機材の撤収をもって現地での作業を終了した。整理作業は現地調査終了後の6月10日から開始した。7月30日に報告書を刊行し、全ての作業を完了した。

IV 基本土層

基本土層は南北に長い調査区の中央部に設定したM-1号周堀の断面土層(Fig. 6・7 M-1 SPB)にて観察した。各層について記す。

I層は表土層。II層は天仁元年(1108)の浅間山の噴火により噴出したAs-B軽石を含んだ砂質の黒色土、いわゆる「B混土」である。III層は1128年噴火の浅間船川テフラ(As-Kk)の青灰色砂質細粒火山灰層、IV層はAs-B軽石一次堆積層上位のフォール・ユニット(桃色細粒火山灰層)、V層はAs-B軽石一次の堆積層である。III～V層ともM-1の覆土で確認できるが、場所によっては残りの悪い場所も見られる。VI層はAs-B下の黒色土層、VII層はローム漸位層、VIII層は小礫を含むローム層である。VIII層に混入する小礫はVII層以下に堆積する陣場岩屑などに由来する岩塊に関係すると考えられる。

V 遺構と遺物

池端屋敷小路遺跡の発掘調査においては、古墳時代後期・平安時代・中近世の遺構・遺物が検出された。古墳時代後期の遺構については、発掘区ほぼ全域が周堀に含まれるという特殊性を有するが、それについてはVI章で詳述するとして、本章では周堀の外周部としての記載とする。

M-1号周堀 (Fig. 4・5・7, PL. 1・2)

古墳は発掘調査区域外、発掘区東側に隣接する神明宮を墳丘頂部に鎮座させる直径約24mを計測する不正円形を呈し、現地表からの比高差は約4mを計測する。今回の発掘調査では、墳丘部を中心に巡る周堀の外周部が(X61～64, Y36～38)で一部に肩部として、その形状を現している。また外周肩部より南東方向側に向かい、本来の地形と異なる傾斜を現し周堀最深部を示していると考えられる。外周肩部と周堀最深部と思われる比高差は約1.3mを計測する。しかしながら周堀中央最深部と推定される区域は、群馬用水が通る場所(発掘区域外東側)と考えられる。また発掘区域内東端部にはW-1号溝が南北方向に縱断しており本来の最深部を計測することはできなかった。発掘区南側全域においては、発掘区北側の傾斜に比してその傾斜は比較的緩やかであるが本来の地形が示す傾斜であり、周堀内あるいは全周することの無い周堀南端部の可能性もあり、周堀外周部は発掘区域外である西側を巡るものと考える。この遺構の時期については出土遺物が少なく、疑問に思われる可能性も否定できないが、器形の判断できうる遺物(1)と古墳の規模・形状から、6世紀後半～7世紀初頭と考えられる。

W-1号溝 (Fig. 4・5, PL. 1・3・4)

位置は(X63, Y37～45)。主軸方向はほぼ南北を示す。ただし、東側の立ち上がりは調査区域外となり、西側壁と最深部が検出された形となる。検出長は32mを計測し、形状については発掘区の東側を南北に縱断する形を呈するが、北端部から南端まで直線上に同じ幅を持つものと考えられる。また、(X64, Y37)の溝北端と(X63, Y43)の位置からは湧水がみられた。出土遺物は陶磁器が数点出土しているが、その器形を判断できうる遺物は陶磁器の皿1点である。推定口径140mm、底径70mmを計る。ロクロ整形の後染め付け、焼成は堅敏。時期的には18世紀後半から19世紀前半の肥前系陶磁器と考えられる。これらのことから、W-1号溝は江戸時代後期の排水溝と比定して良い。

W-2号溝 (Fig. 4・5, PL. 1・3・4)

位置は(X61・62, Y36～43)。(X61, Y37)が北東の角部となり、ほぼ東西・南北方向に居住地を方形に区画する溝(根切り溝)と考えられる。南北方向の検出長は26m、東西方向は3.5mを計測する。ただし、東西方向については発掘区域外の西に溝が延びているのが確認できる。溝幅は、東西方向で3m、南北方向最大幅(X61, Y37)2mを計測する。本来的な形状は根切り・区画の溝であり、方形を呈するものであるが、発掘区南側では、傾斜のため遺構確認面が北側に比して低く、溝幅・深さ共に小さい。出土遺物は陶磁器が数点出土しているが、その器形を判断できうる遺物は陶磁器の碗1点である。推定口径122mm、底径65mmを計る。ロクロ整形の後染め付け、焼成は堅敏で、碗の内面には貫入が多く見られる。瀬戸・美濃系陶磁器であり、時期的にはW-1号溝の遺物同様、18世紀後半から19世紀前半の所産と考えられる。

D-1号土坑 (Fig. 5・7, PL. 1～4)

(X62・63, Y36)に位置する。周堀外周部壁にⅡ層直下、Ⅶ層上面で検出された。覆土は2層に分かれ1層にはAs-B軽石を少量含み、2層には焼土粒子・炭化物粒子を多量混入するが、底部には焼けた痕跡はない。規模は長軸25m、短軸15m、深さ0.20mを計測する不整梢円形、底部は鍋底状を呈する。遺物は土師器・須恵器とともに相当数出土したが、器形を判断できる遺物は4点(1～4)でいずれも須恵器の碗である。4点とも底

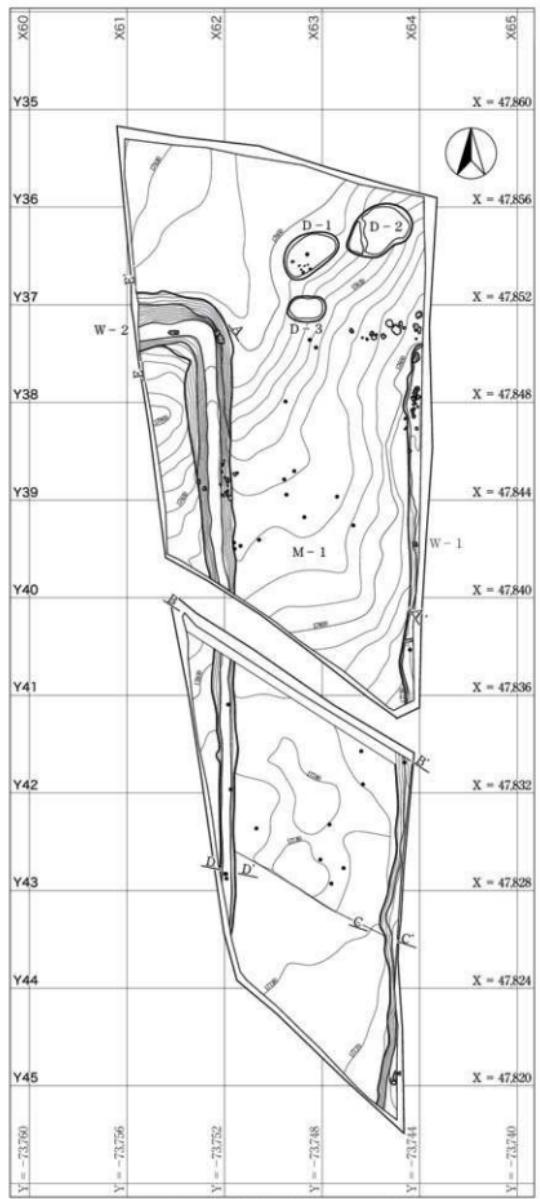
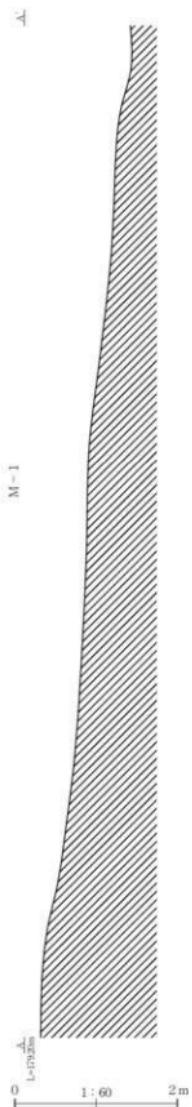


Fig. 4 池端屋敷小路遺跡全體図 (1/200)



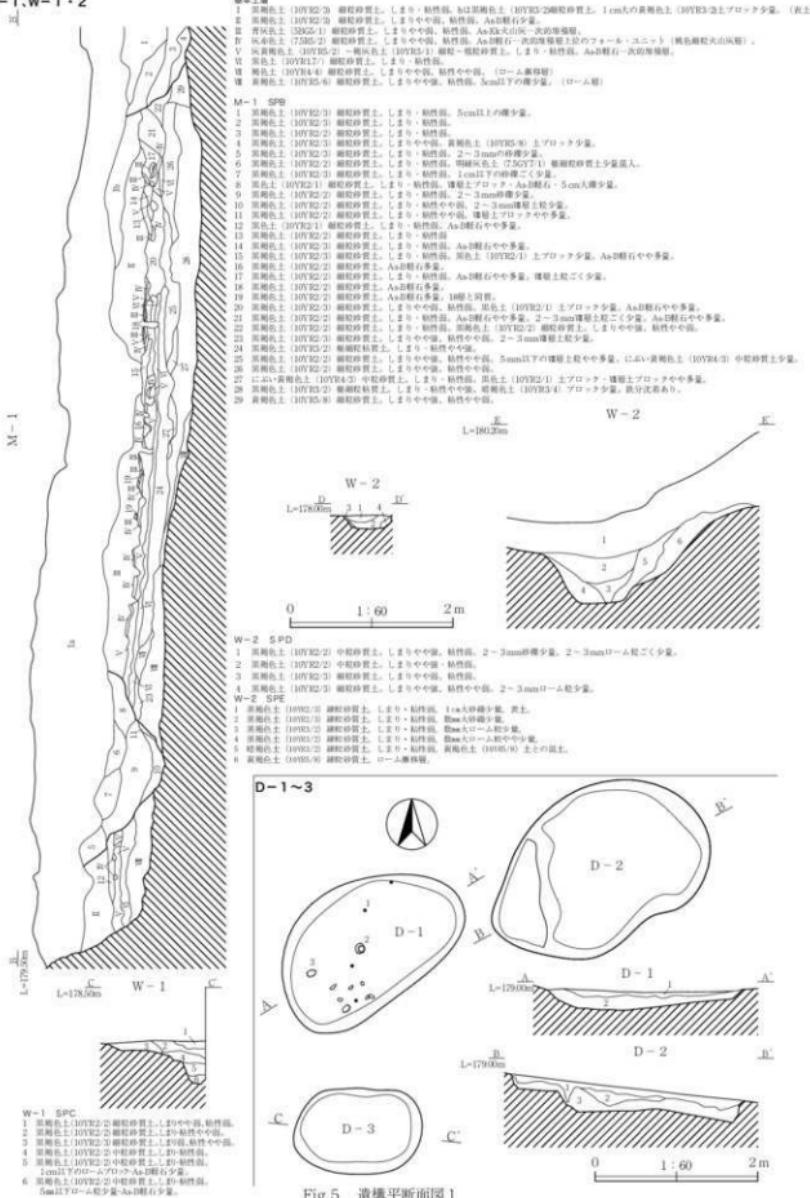


Fig. 5 遗址平面图 1



Fig. 6 遺構平断面図2

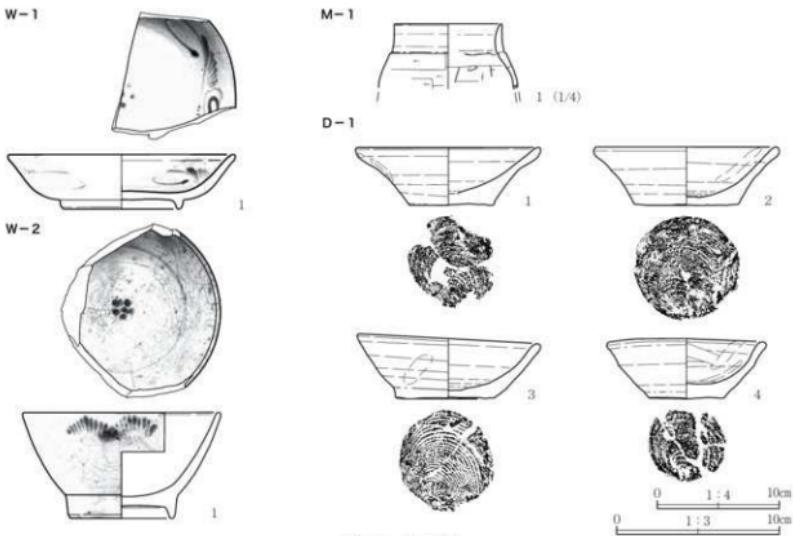


Fig. 7 出土遺物

部は雑な回転糸切り、内外面ともにロクロナデ、焼成は酸化焰でやや不良。その時期については10世紀の所産と考えられる。

D-2号土坑 (Fig. 5, PL. 1~3)

(X63, Y35・36)に位置する。周堀外周部壁にⅡ層直下、Ⅶ層上面で検出された。覆土は2層に分かれ1層にはAs-B軽石を少量含み、2層には焼土粒子・炭化物粒子を多量混入し、3層は小径のローム粒子を多量混入する。規模は長軸28m、短軸1.9mを計測する不整梢円形。底部は2段に構成されており、いずれも平坦な断面形状を呈し浅い底部で0.15m、深い底部で0.35mとなっている。遺構確認面はD-1号土坑同様Ⅶ層上面である。出土遺物はないが覆土・形状からD-1号土坑同様の時期(10世紀)と考えられる。

D-3号土坑 (Fig. 5・6, PL. 1~3)

(X62・63、Y36・37)に位置する。周堀外周部壁にⅡ層直下、Ⅶ層上面で検出された。覆土3層に分かれ1層にはAs-B軽石を少量含み、2層には焼土粒子・炭化物粒子を多量混入し、3層は小径のローム粒子を多量混入する。規模はD-1号・2号土坑に比して小さく長軸1.6m、短軸1.2mを計測する梢円形。底部は鍋底状を呈するが、東に向かって傾斜している。出土遺物はなく、形状はD-1号・2号土坑と異なるがその覆土から判断すれば、ほぼ同時期の所産と考えられる。

Tab. 2 池端屋敷小路跡出土遺物観察表

M - 1

No	出土位置	種別・器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	窓上 土壙部 基 Y64	瓦舟	34.6	18.6	5.6	白・黑色粘 土質	高	褐	内側に鉢形コリナ、口縁に切妻形を有し、底付部より側壁 内側に鉢形コリナ、底付部より側壁	1/4回・折断片。

W - 1

No	出土位置	種別・器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	窓上 陶器部 基 Y65	瓦舟	37.0	27.0	3.4	粘土質	高	褐	側壁直立、口付付付付後、透明白施釉、支脚は外側に留め、内側を左、足 底付部に墨色色が施されている。	1/4馬力、把柄部、18~19世紀か。

W - 2

No	出土位置	種別・器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	窓上 陶器部 基 Y62	瓦舟	6.5	6.5	粘土質	陶器	90.0	側壁直立、口付付付後、透明白施釉、支脚は外側に留め、内側を左に施 されが施されている。底付部に墨色色が施されている。	1/2馬力、底付部、広葉柄、 18~19世紀。	

D - 1

No	出土位置	種別・器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	No. 2 - 第1 陶器部 基 Y14	瓦舟	5.2	3.5	白・黑色粘 土質	陶器	1/2-3 馬力	内側にコリナ、底付部に墨色 内側にコリナ。	1/2馬力。	2/3馬。
2	No. 3 陶器部 基 Y15	瓦舟	6.3	3.7	黑・黑色粘 土質	陶化粘 土質	明葉地	内側にコリナ、底付部に墨色 内側にコリナ。	1/2馬。	2/3馬。
3	No. 4 陶器部 基 Y15	瓦舟	6.1	4.1	白・黑色粘 土質	陶化粘 土質	1/2-3 馬力	内側にコリナ、底付部に墨色 内側にコリナ。	1/2馬。	1/2馬。
4	一般 田畠部 基 Y80	瓦舟	4.8	3.7	白・黑・黑色粘 土質	陶化粘 土質	褐	内側にコリナ、底付部に墨色 内側にコリナ。	1/2馬。	2/3馬。

VI まとめ

今回の発掘調査では、古墳時代後期の周堀と考えられる遺構、平安時代・中近世の遺構が検出されたが、V章で触れた発掘区ほぼ全城が周堀内といいう結果について、資料の少なさはあるものの検討を加えてみたい。

今回の発掘調査に先立ち、前橋市教育委員会による試掘データから周堀の可能性が提示され、発掘調査の事前準備として墳丘とその周辺の地形について踏査を行った。

古墳の規模・形状

隣接する古墳は発掘調査区域外、発掘区東側に隣接する神明宮を墳丘頂部に鎮座させる。その規模については、直径約26mを計測し、平面形状は不整円形を呈する。また、現地表からの比高差は約4mを計測する。墳丘頂部は神明宮創設時に削平されたと思われ、南側の参道階段部も同様に整形されたものと思われる。

墳丘は盛土によって形成され、木々により森のような状況を呈し墳丘頂部及び南側階段部分を除き、残存状態は良好であるといえる。墳丘裾部と周辺平坦面を区画する基底ラインは、葺石等の境界も構成されていない。現形状は直径26mの中には収まる不整円形であるが、その西側を群馬用水、北と東は畑地、南側は神明宮の参道となっており、墳丘裾部は削平をうけてその規模を縮小された可能性がある。

周堀

周堀についてはV章において述べたが、本章で改めて記述する。発掘区域内で検出した周堀外周部は(X61~64、Y36~38)に一部に肩部として、その形状を現している。また外周肩部より南東方向側に向かい、本来の地形と異なる傾斜を現し周堀最深部を示していると考える。また、土層堆積状況を示す(Fig. 5 M - 1 SPB)においても東西方向に同じ傾斜を示している。

外周肩部と発掘区域内周堀最深部と思われる比高差は約13mを計測する。しかしながら周堀中央最深部と推定される区域は、発掘区域外東側である群馬用水が通る場所と考えられ、発掘区域内東端部にはW - 1号溝が南北方向に継続しており本来の最深部を計測することはできなかった。発掘区(X62、Y36)の外周部から墳丘中央までの距離は40mを計測し、墳丘の規模に対してかなり大きい数字となる。また、必ずしも墳丘の形状に

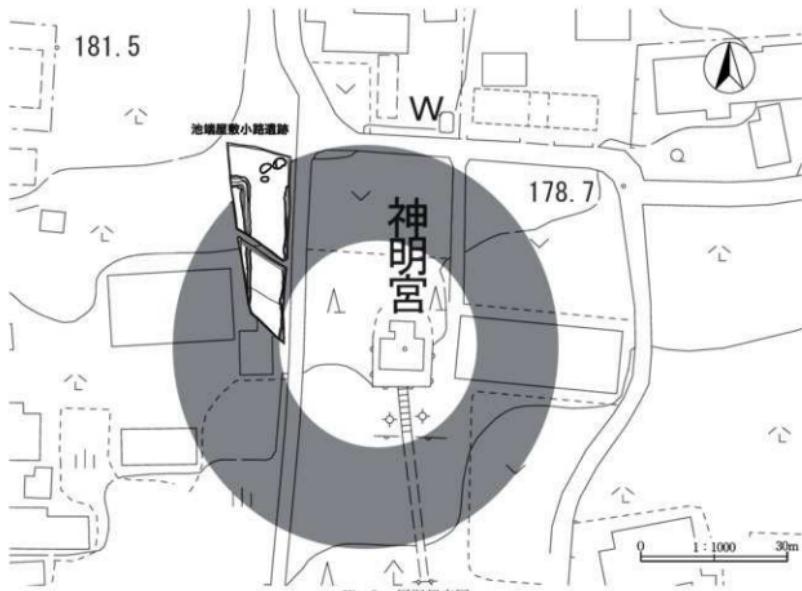


Fig. 8 周囲想定図

沿っておらず、丸みを帯びた角を現している。周囲内の堆積土はⅠ層の表土をのぞいて底部のⅦ層まで大きく6層に分けることができる。堆積層は下層～上層まで自然堆積を示しており、黒ボクやロームブロックといった底面の凹凸を調整する整地層の痕跡はみられなかった。

先にも述べたとおり、本遺跡の発掘区南側全域においては、発掘区北側の傾斜に比してその傾斜は比較的緩やかであるが本来の地形を示している。古墳北部の畠地から古墳南側参道までと同様、発掘区においても北から南に向かって緩やかな傾斜を示し、その比高差は約2.5mを計測する。本遺跡は周囲内に位置するものであり、周囲外周部は発掘区域外である西側を巡るものと考える。

上記の記載については検討材料が少なく、発掘面積が小さく古墳周囲のごく一部を調査したに過ぎないが、調査結果と可能性について述べてみたが、推論の域を脱したものとは言いがたい。今後、周辺地域の調査事例が増加し、それらの資料によって改めて検討されることを期待する。

参考文献

- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 「清里・長久保遺跡」
- 吉岡町教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団 1986 「七日市道路 諏訪古墳 女塚道路」
- 東吾妻町教育委員会 2003 「町内道路Ⅰ『小泉宮戸道路』」
- 吉岡町教育委員会 2017 「七日市道路」
- 前橋市教育委員会 2011 「總社町屋敷南道路2」
- 前橋市教育委員会 2018 「山王若宮V道路」

写真図版



調査区全景（上が北）



調査区北側（上が北）



調査区南側（上が北）



調査区土層断面（南から）



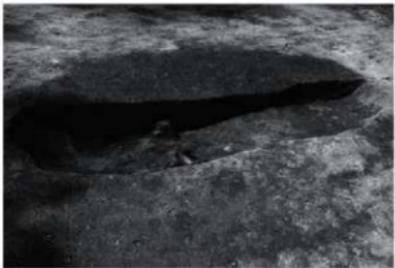
調査区北側 周縁・土坑発掘風景（南から）



古墳周縁外周（白線部）検出状況（南から）



調査区北側遺物出土状況



D - 1 土層断面（南から）



D - 1 遺物出土状況



D - 2 土層断面（南から）



D - 2 全景（南から）



D - 3 土層断面（南から）



D - 3 全景（南から）



W - 1 土層断面（南から）



W - 2 発掘風景（南東から）



W - 2 土層断面（東から）



W-1 全景（調査区北側）



W-1 全景（調査区南側）



W-2 全景（調査区北側）



W-2 全景（調査区南側）



W-1-1



M-1-1 (1/3)



D-1-1



D-1-2



W-2-1



D-1-3



D-1-4

池端屋敷小路遺跡 出土遺物

報告書抄録

ふりかな	いけはたやしきこうじいせき
書名	池端屋敷小路遺跡
副書名	清里地区南北幹線2期整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	-
シリーズ名	-
シリーズ番号	-
編著者名	高橋政充
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町 1-15-3
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市総社町3-11-4
発行年月日	2020年7月30日

所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	位置		調査期間	調査面積	調査原因
				北緯	東経			
いけはたやしきこうじいせき 池端屋敷小路遺跡	前橋市 いけはたやしきこうじいせき 池端町154-10、 154-11	10201	2A253	36°42' 81	139°1' 8	20200520 ～ 20200608	436m ²	清里地区南北幹線2期整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
池端屋敷小路遺跡	古墳	古墳 奈良 近世	周堀 土坑 溝	1条 3基 2条	土師器 須恵器 陶磁器 ・古墳の周堀 ・江戸期の区画溝

池端屋敷小路遺跡

清里地区南北幹線2期整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020年7月29日 印刷

2020年7月30日 発行

発行

前橋市教育委員会

〒371-0853 群馬県前橋市総社町3-11-4

TEL 027-280-6511

編集
印刷

技研コンサル株式会社

朝日印刷工業株式会社

